

中島久万吉・中村春二・野口援太郎の教育観からみた 城西実務学校と城西学園

— 城西大学の建学の精神「学問による人間形成」を考えるために —

村越純子

要 旨

城西大学の建学の精神「学問による人間形成」の今日的意味を考える手がかりを得るために、城西大学の創立母体であった城西学園の教育内容および、城西学園の前身として位置付けられる城西実務学校の教育内容との間の連続性について検討した。そこでは、「新教育」の精神が城西実務学校創立者の中島久万吉、成蹊実務学校の創立者であり城西実務学校学監であった中村春二、城西学園創設者の野口援太郎を結びつけていたこと、そしてそれは、城西実務学校から城西学園に受け継がれたことを明らかにした。

キーワード：新教育，大正新教育運動，中島久万吉，中村春二，野口援太郎，
城西実務学校，成蹊実務学校，城西学園，城西大学，建学の精神

1. はじめに

城西大学では今日、建学の精神として「学問による人間形成」が掲げられている⁽¹⁾。これは城西大学第1回卒業式（1969年3月29日）の式辞のなかで創立者水田三喜男が述べた「学問はそれ自体が目的ではない、あくまでも人間形成の手段である」⁽²⁾という言葉に基づいている⁽³⁾。「城西大学設立趣意書」（「学校法人城西大学寄附行為認可申請書（1964年9月30日付）」）に記された「設立の趣旨と目的」によれば、城西大学は「優れた研究者で、識見の高い教育家」による「智と和を一体とした熱意ある指導」により、「特色ある学風を醸成」して「国家社会のよき形成者」を養成すること⁽⁴⁾を目指していた。設立の目的が水田の言葉に集約され、それがさらに短く、「学問による人間形成」と表現されることになったのである。

このように考えられる上述の建学の精神をもつ城西大学については、「新教育」（大正新教育運動）を専門とする日本教育史研究者である、中野光および大井令雄が次のような指摘をしている。野口援太郎は「城西実務学校」を母体として「城西学園」を創設し、同校を新教育運動の拠点にしようとしていたこと、そして戦後には「城西学園」を母体として城西大学が創立されたことなどである⁽⁵⁾。そのうえで中野は、城西大学の教育については、「野口の教育精神が、その後の六十年の歴史においてどのように生かされたかは、改めて問われるべきであろう」という課題を提示している⁽⁶⁾。

「城西実務学校」を母体として「城西学園」を創設した野口援太郎は、「日本における「新教育」＝自由教育の開拓者」⁽⁷⁾と評される教育者であると同時に、学校制度改革の提言者でもあった。『高等小学校の研究』（1926年）を著し、「戦

後の教育改革における六・三・三制へのもっとも早い時期の先駆的提言」をしたと言われている⁽⁸⁾。人間形成における中等教育の意義を主張するとともに、「新教育大学」設立を構想し、そこで「新教育」指導者養成を図ろうとした⁽⁹⁾。「野口にとって、「城西学園」とは、まさに日本における新教育の研究実践の一大総合研究センターでなければならなかった⁽¹⁰⁾」というのである。

また「城西学園」の母体となった城西実務学校の創立者である中島久万吉⁽¹¹⁾（1873-1960）は、維新の功績によって男爵に叙せられた中島信行（1846-1899）の長男として生まれた。実母初穂は陸奥宗光の妹で1877年に逝去、継母は女性解放運動の先駆者として著名な中島湘煙（旧姓岸田俊子）である。

中島久万吉は実業家として、渋沢栄一の信頼が厚かった人物であり、古川財閥の発展に貢献し、1932年には斎藤実内閣の商工大臣になるなど政財界でも活躍した。村山元理は経営学の視点から行った研究サーベイに基づき、「中島は学識が非常に高く、スピリチュアル・リーダーシップを発揮した財界人としては稀有な存在⁽¹²⁾」と評している。同時に、「中島久万吉は、尊氏論で商工大臣を辞任しこと以外は、ほとんど忘却されている大正・昭和初期の大物財界人である。彼は財界人として多方面にもものを書き、講演を行った。学者肌で博覧強記の人であった⁽¹³⁾」とも評している。あわせて「新教育主義は彼の造語である。欧米の最新の教育論を紹介した中島については教育史から評価すべき⁽¹⁴⁾」であることを指摘している。

近年、大正新教育の研究では、国際新教育運動の受容過程や、教育実践の刷新との関係に焦点を当てて大正新教育を思想的に位置づける研究⁽¹⁵⁾がなされている。第1次世界大戦後の日本において、欧米の新教育論が受容された背景には、明治末期の国家主義的な学校教育（公教育）が、画一主義、注入主義、暗記主義的な教育方法

に偏っていたことに対する批判があったと言われている⁽¹⁶⁾。そして国家主義体制という枠組みのなかではあるが、大正期から昭和初期にかけて新しい教育実践としての新教育は総花的に展開していったが、その共通点は子どもの個性および自発性の尊重を主張していたことであると指摘されている⁽¹⁷⁾。

そこで本稿は、上述の先行研究が提示した問題意識を共有し、かつ大正新教育研究のこれまでの成果をふまえ、城西大学の建学の精神の今日的意味を明らかにする前段階の作業として、3人の学校経営者の教育観からみた城西実務学校と城西学園における教育の連続性について検討する。3人の学校経営者とは、城西実務学校を創立した中島久万吉（1873-1960）、城西実務学校学監であった中村春二（1877-1924）、そして城西学園を創設した野口援太郎（1868-1941）である。

本稿で得られる観察結果は戦後、城西学園を母体として設立された城西大学の建学の精神の今日的意味を検討するための手がかりとなるはずである。

2. 城西実務学校と中島久万吉

1918年7月に創立された「私立城西実務学校」の校名については、創立時の校地（東京府北豊島郡長崎村大字長崎自壺千五番地至壺千拾壺番地）が「皇城の正四位にあたる所から城西としたので、呼称はジャウサイ⁽¹⁸⁾」であったという。現在の城西大学附属城西中学・高等学校の校歌（土井晚翠作詞）は1952年に制定されたものであるが、その歌詞には「皇城の西の学園 わが学び舎」とあり、「城西」の由縁が推測できる。

城西実務学校の設立目的は、「尋常小学校卒業程度ノ生徒ヲ収容シテ三ヶ年間ニ実務家トシテ自立自活ノ素ヲ養成セシム⁽¹⁹⁾」とあり、学則第24条には「卒業生ハ運輸交通ニ関スル実務ニ従事スベ

キモノシテ本校ハ責任ヲ以テ卒業生ノ将来ニ就テ督励指導スルモノトス」⁽²⁰⁾とある。城西実務学校設立認可の理由を記した視学の清水福市も、「私立成蹊実務学校ノ成績ニ鑑ミ設立者ガ関係セル会社商社ニ使用スベキ下級事務員ヲ養成センガ為特ニ設立ヲ企テタルモノニシテ一種ノ特色ヲ有セル学校ナリ」(「設立ノ動機」)⁽²¹⁾と記している。実際、「運輸交通ニ関スル実務ニ従事スベキ」とされた城西実務学校の1921年度卒業生27人全員が日本運送株式会社および明治運送株式会社に就職したことを確認できる⁽²²⁾。

城西実務学校の創立者は「はじめに」で示したとおり中島久万吉(1873-1960)である。城西実務学校の創立費用「金壹萬五千圓」には「校舎一棟、寄宿舎二棟、校長住宅一棟建築費」(金壹萬貳千圓)が含まれており、かつ学校維持費「年額金壹萬圓」は日本運送株式会社が支出することとされた⁽²³⁾。その後1925年6月まで経費のすべては国際運送株式会社および明治運送株式会社から支出された⁽²⁴⁾。中島は1917年10月に日本運送株式会社取締役⁽²⁵⁾、1919年6月に日本運送株式会社社長に就任している⁽²⁶⁾。日本運送株式会社は1923年に東亜運送株式会社との合併を機に社名を国際運送株式会社と改称した。合併と同時に中島は同社社長に就任し、1926年8月に退任している⁽²⁷⁾。中島が城西実務学校の運営資金を提供した理由は、前述のとおり「設立者ガ関係セル会社商社ニ使用スベキ下級事務員ヲ養成」であった。ただ、城西実務学校の設立や運営の構想は日本運送株式会社専務取締役であった竹内龍雄によるもので、彼が中島久万吉を擁して設立したとの指摘もある⁽²⁸⁾。いずれにせよ城西実務学校設立は中島久万吉が第1次世界大戦以前に関与した一連の投資事業のなかの一つと評価できるだろうが⁽²⁹⁾、同校創立後まもなく、中島は、欧米の「新教育」に強い関心を持つようになった。

このことが分かる、中島久万吉著『核心之間

題』(私家版、1923年)をとりあげる。この文献は、中島が1921年から1922年の欧米視察のなかで⁽³⁰⁾、第1次世界大戦後の急激に変動する欧米社会の実情を目の当たりにし、欧米での経験を契機に「新らしき社会」を構想し、その実現に向けて「新教育主義」を提言したものである。同書のなかで「現下の頹唐的人心を作興し、且輒もすれは暗黒より暗黒に進まんとする将来の人類社会に向て光明を投ずるものは、実に新教育主義の外に其物無きことを識るに足ると思ふ。余は敢て新教育主義と言ふ。」⁽³¹⁾と述べている。

中島にとって「教育」とは「人間の内に存する何等の或物を開発せしむる」ことであり⁽³²⁾、「個人人格の向上」は生涯にわたって目指されるべきことであるがゆえに「学問教育は人間に在りて実に其生涯の事業なり」⁽³³⁾という考え方である。このため第6章「教育の根本的改革」では、学校教育への提言のみならず、「学校卒業以後の教育」は「社会人たるに必要なる智識の涵養を圖らねば成らぬ」⁽³⁴⁾とし、イギリスの「成年教育」(Adult Education)⁽³⁵⁾を紹介している。

第5章「新社会の必要とする精神的要素」では、「新らしき社会」を実現するための5つの精神的要素として、「平等の権利」、「社会奉仕の観念」、「社会能率の向上」、「人格の尊重」、「一致連帯の精神」を掲げている⁽³⁶⁾。「平等的観念と謂ふことは実に価値の最高標準たるべきもの」とし、「教育上に於る機会均等と謂ふことか、新らしき社会の標語たるべきこと」と述べている。そして「社会能率の根底を作すものは矢張智識に外ならぬ」とし、「知識を有効的に人民の間に普及せしめ」たうえで、「其知識を最も有効的に社会組織の上に活用せねば成らぬ」という。そのうえで「新らしき社会の終極目的か個人人格の向上に在るべきは自明の理」⁽³⁷⁾と強調している。「一致連帯」については「現今国際間に於る経済的相互依属の関係」と「人類に於る精神的相互依属の関

係」の2つをあげ、とくに後者は「教育の発達に随て愈よ顯著に成て来る」とし、「教育は益す国際的に進歩せんとする」と述べている。中島のいう「新らしき社会」は国家主義的制約から解き放たれており、個人の平等と自由を前提とする「新らしき社会」をつくるために必要な、人間のための「新教育」という発想である。

ところで、日本における新教育運動は欧米の新教育論の紹介からはじまった。日本の「新教育」実践書の嚆矢として独自の「動的教育論」を述べた及川平治著『分団式動的教育法』(1912)と『分団式各科動的教育法』(1915)は、デューイの教育論だけではなく、ベルクソン哲学の影響をうけていたと言われている⁽³⁸⁾。他方、キルパトリックによる「プロジェクト・メソッド」は1921年から⁽³⁹⁾、またヘレン・パークーストによる「ドルトン・プラン」も1921年から日本の雑誌で取り上げられるようになった⁽⁴⁰⁾。

『核心之問題』は1923年に出版されたので、欧米の新教育論紹介の嚆矢とはいえないが、中島自身が「欧米に於る新教育主義の実施施設」を実際に視察してまとめたものである。同書第6章「教育の根本的改革」では、20世紀初頭に「パリの一隅から、深く鋭い而も清新な調子を以て、全世界のすみずみにまで一種深刻なショックと驚嘆とを与えた」⁽⁴¹⁾といわれるベルクソンの文章が頻繁に引用されている⁽⁴²⁾。そして学校教育の第一の目標は「個性の開発」にあるとし、とくに「人間の獨創力」を高めることを強調している。そして「獨創力の養成」においては「個人をして自ら其作業を選択せしむること」が大事とし⁽⁴³⁾、この点で、「学齡児童に向て特に創作力養成の方針に依る新教育法」である「ダルトン教育法」(ドルトン・プラン)は有効と述べている⁽⁴⁴⁾。また、「プロジェクト・メソッド」の骨子についても、「最も適切なる教授法は蓋自ら学ふに在り」とし、たうえて、デューイの教育論を次のように要約し

ている。

「学校内に実験室や、工場や、遊戯場^マやを設備することに依て、社会実生活の状態を此處に現成せしめ、学生をして自由に之を使用せしむるか爲に、其進歩的経験の獲得に向て、知識及思想を自得せしむへく、又更に之等を応用せしむることも出来る」⁽⁴⁵⁾

そして子ども自らが「計画作用」して「経験」から学ぶことの価値について説明したうえて、アメリカの大学で「プロジェクト・メソッド」が応用され取り入れられている事例を紹介している⁽⁴⁶⁾。

上述のとおり、実業家である中島久万吉は、ベルクソン哲学にかなり影響を受けており、第1次世界大戦後の「新らしき社会」の実現には、学校教育のなかで子どもの「個性の開発」がなされ、「人間の獨創力」が養われなくてはならず、そのためには欧米の「新教育」の考え方を積極的に取り入れた教育方法が必要と説いていた。中島の教育観に独自性があったとすれば、それは人間の教育期間を「学校教育」だけに限定せず、「学校卒業以後の教育」を想定し、生涯にわたって学び続けることにより「個人人格の向上」をめざすところであろう。

城西実務学校の設立目的が「設立者ガ関係セル会社商社ニ使用スベキ下級事務員ヲ養成」にあつたにせよ、子どもの個性や自発性を尊重しようとする「新教育」の精神を城西実務学校の教育に反映させようとしたのではないかと考えられる⁽⁴⁷⁾。城西実務学校設立と同時に、成蹊実務学校の創立者中村春二(1877-1924)が「学監」として招かれているからである。次節では中村春二の教育観を具体的に検討する。

3. 城西実務学校と中村春二

城西実務学校設立時の「学監」は成蹊実務学校

の創立者中村春二（1877-1924）である。「学監」は職制のなかに位置づけられ「本校教育方針ニ就テ監督の地位ニ立ツモノ」⁽⁴⁸⁾とされている。では、成蹊実務学校を創立した中村春二がなぜ城西実務学校の「学監」に就任したのか、城西実務学校と成蹊実務学校とはどのような関係にあったのかを、中村の教育観から検討しよう⁽⁴⁹⁾。

中村春二は1906年に設けた学生塾「成蹊園」を母体として、1912年に「私立成蹊実務学校」を創立した。成蹊園は実業家であった岩崎小弥太と今村繁三が共同で出資した育英事業のために創られた⁽⁵⁰⁾。岩崎と今村は、中村の高等師範学校附属中学校時代の同級生であり、後年ケンブリッジ大学で学んだ。中村はこの2人を通じて「英国の学校教育は、個性を尊重し、自由なる雰囲気により行われ居」⁽⁵¹⁾ることを成蹊園設立以前から理解していた。「私立成蹊実務学校創立趣意書」（1911）は中村、岩崎、今村の連名で作成されている。岩崎と今村は自らの抱く教育理想を、朋友中村を通じて実現したいと念願し、成蹊実務学校設立時に賛助員となり資金援助した⁽⁵²⁾。

「大正自由教育」の研究者であった中野光は、著書の一節「中村春二の教育思想と成蹊学園」で、成蹊実務学校を「新学校」の典型事例とし、同校設立当初の中村の教育観を次のようにまとめている。中村は社会の「中流以下の恵まれざる家庭」から「健全なる中流」をになう人材を選抜して育成することを目指し、そのため「少数学級制」（1クラス20名）を採用することによって個性を尊重し、実務的な学科を授けて師弟の人格的接触による教育力の充実をはかろうとした、というのである⁽⁵³⁾。設立当初の秀才選別という英才教育の考え方は、1920年頃に「人物教育」へ転じたといわれるが⁽⁵⁴⁾、強調すべき中村の教育観の特徴は「個性の尊重、品性の陶冶、勤労の実践」⁽⁵⁵⁾である。このような中村の教育観に基づく教育方針や教授法は、城西実務学校に受け継がれ

ているという。城西実務学校の「設立の要旨」（1919年）には、「其の教育方針及び教授の手段は、彼の八年前より東京市外池袋に設立せられて、令名世に高き成蹊実務学校と根底に於て同じものであります。幸ひ成蹊学園長中村春二氏も同主義実行の学校の付近に設立せられたことを悦ばれ、特に学監として本校教育上の監督指導の任に当ることを快諾せられた次第であります」⁽⁵⁶⁾とある。城西実務学校の教育方針や教授法は成蹊実務学校のもの「根底に於て同じ」であったのである。具体的には中村春二が成蹊実務学校で実践した著名な「凝念法」と「作業」、寄宿舎生活における「知行合一」および「自治」が、城西実務学校においても実践されていた。城西実務学校の創立当初の学則の学科課程表の付記には「凝念法ハ毎日三十分 作業ハ毎日二時間ヲ課スコト」⁽⁵⁷⁾とある。「凝念法」とは、中村春二が成蹊実務学校創立時に、曹洞宗の座禅を手がかりにして考案し、成蹊実務学校で実施したものである⁽⁵⁸⁾。具体的には、始業前の30分間に静座して目を閉じ、無念無想の境地になって精神を集中する訓練のことである。

また城西実務学校で学ぶ生徒は原則として寄宿舎に入ることとされた。「私立城西実務学校寄宿舎規則」には次のように示されている。

「第一条 本寄宿舎ハ独立自尊ノ主義ニヨリ高尚ナル気品ヲ涵養シ心身ノ発達ヲ健全ナラシメンコトヲ期ス 第二条 知行合一ノ実地指導ノ為メニ生徒ハ全部寄宿舎ニ入ラシム 但已ムヲ得サル事情ニヨリ自宅ヨリノ通学ヲ請フモノハ特ニ許可スルコトアルヘシ 第三条 寄宿舎ハ校長舎監々督ノ下ニ自治制度トシ生徒自ラ万事ヲ処理ス 第四条 寄宿舎ハ自炊ノ事トス」⁽⁵⁹⁾

城西実務学校では、成蹊実務学校と同様に、中村春二の教育観（個性の尊重、品性の陶冶、勤労の実践）が反映されており、とくに寄宿舎での協働生活をとおして「知行合一」の実地指導がなさ

れただけではなく、生徒に「自治」を促すことによって彼ら自身が「独立自尊」の精神を身につけることが目指されていた。城西実務学校は、成蹊実務学校と同様、「新教育」（子どもの個性や自発性を尊重する新しい教育実践）に取り組む「新学校」の典型であったといえる。

4. 城西学園と野口援太郎

「城西実務学校」を母体として「城西学園」を創設した野口援太郎（1868-1941）の業績については、その主な活動時期から大きく3期に分けられる⁽⁶⁰⁾。第1期は姫路師範学校長時代、第2期は帝国教育会専務主事時代、第3期は「教育の世紀社」結成と実験学校の経営および新教育協会会長の時代である。「教育の世紀社」は新教育運動を起こすため、1923年に野口援太郎、下中弥三郎、為藤五郎、志垣寛を同人として結成された。野口が目指す「新教育」を実現するための実験学校として、1924年に「池袋児童の村小学校」が設立され、その翌年の1925年に城西実務学校が改組されて「城西学園」が創設された。城西実務学校の学則変更と「城西学園」への改称が東京府知事から認可され⁽⁶¹⁾、同時に学校設置者も中島久万吉から野口援太郎に変更された⁽⁶²⁾。城西学園は修業年限3年の実務部と修業年限5年の中学部からなる「私立中学校ニ類スル各種学校」となった⁽⁶³⁾。さらに1927年には中学校令に基づく「財団法人城西学園中学校」（修業年限5年）に改組された⁽⁶⁴⁾。

「教育の世紀社」が1923年から発行した雑誌『教育の世紀』に、野口は「あこがれの城西学園—中等学校に新教育の試み」⁽⁶⁵⁾という論文を寄稿している。同論文で、野口は中島久万吉から城西実務学校の運営を引き継いだ経緯について次のように述べている。「私はある事からしてよほど以前からこの学園を知つて居た。その時からどうか

この位の学校で中等学校を経営したいと云ふ希望が常に私の胸中に往来して居た」という。そして、城西実務学校とその校舎を取り巻く環境全体を「あこがれの学園」と思っていたところ、「私の念願が届いたものか、不圖したことからこのあこがれの学園が私共のものとなつた」と述べている。そして城西実務学校という「あこがれの城西学園が授けられた」経緯についてさらに続けて次のように述べている。

「私の東京に出での仕事の成績は、みんなが以前姫路に居た二十年間の結果としか思はれないのであるが、このあこがれの学園が私共の手に入つたのも、実にまたこの結果である。それは私と会社とを結びつけたこの媒介者は、二人とも皆、私と共に姫路で働いて居た人であるのみでなく、私がこの学園に對してあこがれを有つようになつたのも、この二人の人々のそこに居られたからである。私は因縁の關係の深刻なことを痛感せずには居られない。」⁽⁶⁶⁾

ここで指摘されている「この二人の人々」とは城西実務学校の校長であつた新井博次と同校で教員であつた谷口傳蔵である⁽⁶⁷⁾。この2人を含めて5人が城西実務学校から引き続き城西学園の教師になつた⁽⁶⁸⁾。城西実務学校側には次のような事情があつた。城西実務学校の運営基金拠出者であつた竹内龍雄が国際運送株式会社を辞任したことにより、同社からの援助金が1925年6月で打ち切られることとなり⁽⁶⁹⁾、実質的な経営破綻に直面していた。野口は「会社は如何にこの学校を處置せんかと思ひ煩ひつゝあつた」という。熟慮の結果、城西実務学校を引き継ぐことを決意し、新たな経営基盤を持つ財団法人城西学園を発足させた。このような過程を経て発足した城西学園には、城西実務学校における「新教育」の精神が受け継がれたと考えてよいだろう。

野口援太郎著『私の教育思想と其実際』（城西学園中学校内木犀會、1935年）⁽⁷⁰⁾をとりあげて、

彼の教育観を確認する。野口は、まず教育を「人格を陶冶する事」と規定し、その内容を「人間を社会人として社会に自活することが出来、更に進んで社会のために盡すことの出来るように、養成すること」⁽⁷¹⁾と説明している。そして社会で「自活」できるだけでなく、「社会のために何等かの貢献が出来る」社会人の育成は中等教育でも可能と考えた。野口は、この目的に叶っていない当時の中学校の有り様を次のように批判している。

「中学の法令には、中学校は上級学校の入学に對する準備教育であるなどとは、どこを見てもないのであるが、遂にこの弊害に陥つたのは寔に遺憾なことである。それで我が校の教育思想の根本は、決して準備教育などに拘束されず、始めから、中学だけで終つても、必らず社会に、立派に立ち得る人間を養成せんことを眼目としてゐる。」⁽⁷²⁾

野口は、当時の社会に学歴主義が浸透する傾向に警鐘を鳴らし、「人格の陶冶」という観点から中等教育の教育学的な価値を主張し、社会人として社会貢献できるだけの基礎的能力を中等教育によって高めることを目指した。子どもの「個性」や、とくに「創造性」を高めることを重視し、そのための教授法として「学座式教育法」を取り入れた⁽⁷³⁾。「学座式教育法」とは、「ドルトン・プラン」にヒントを得て考案した、「自学」（生徒が自学自習する時間）と「講義」を組み合わせた学習方法のことである。野口は子どもの個性を尊重し、子どもに主体的な学習の習慣を身につけさせることが、生涯にわたる「人格の陶冶」につながると考えたのである。

野口は、城西学園中学校において「新教育」の理想を実現しようとして、上述した自らの教育観に基づいた教育実践をした。しかしながら時代が彼の考えに追いついてゆかなかつたせいであろう、1930年代に入ると城西学園の生徒数は減少しはじめ、野口は1938年に、経営難に陥った城西学

園中学校の理事長および校長の職を辞した。

その後、東京府師範学校同窓会会長横島常三郎が城西学園を引き継ぎ、生徒数は急増した。その教育内容は野口の教育方針とは異なり、当時の社会に対応したものであったことから、「戦時体制にそくして自らを積極的に変え、「自由」とひきかえに学校の延命をはかった」と評されている⁽⁷⁴⁾。その一方で、城西学園で学んだ生徒の回想によると、「当時（昭和16～18年）は太平洋戦争が起り、学校教育も軍事教練をとり入れ、学園にも軍国調が漲りはじめていたが、わが城西学園自由教育の気風が漲り、特に英語は敵性語と言われ、他校では英語授業を中止しはじめた中で英語教育は抜群にすぐれていたと思う」⁽⁷⁵⁾と、自由教育の気風があったとする証言もある。「戦時体制にそくして自らを積極的に変え」ながらも、英語教育にみられるように、「新教育」実践の結果、そこに根付いた学校風土があったはずである。この時期の英語教育に携わったのが、1958年に学校法人城西学園理事長となり、城西大学創立時に副理事長兼副学長となった新藤富五郎（1897－1977）である⁽⁷⁶⁾。

野口援太郎は「新教育大学」の設立も構想し、そこで新教育の指導者養成を図ろうとしていた⁽⁷⁷⁾。時代を先取りし過ぎていた「新教育大学」は構想だけに終わったが、野口が目指そうとした「新教育大学」は「六・三・三制」が実現した後のだれもが高等教育にアクセスできるようになった時点で機能するものであったと考えられる。このように考えるとき、野口援太郎の「新教育大学」構想を知っていたはずの新藤富五郎が、副理事長兼副学長として城西大学に野口の構想を取り入れた可能性は十分にあるだろう。

5. おわりに

本稿では城西実務学校を創立した中島久万吉、

成蹊実務学校を創立し、城西実務学校の学監となった中村春二、城西実務学校を改組して城西学園中学校の経営に携わった野口援太郎、それぞれの教育観を詳説した。「新教育」の精神が3人を結びつけていたことを明確にすることができた。中島久万吉が「新らしき社会」を実現するために必要な「人間の獨創力」に価値を置いた「学問教育は人間に在りて実に其生涯の事業なり」という人間形成の探究の精神は、城西学園中学校における教育をとおして野口援太郎によって引き継がれたと解釈することもできる。

今後、城西大学建学の精神の理解のためには、設立母体である城西学園で野口らがおこなっていた「新教育」のうち、新たに城西学園の経営を担った横島らは何を受け継いで何を受け継がなかったのか、そして野口援太郎の「新教育大学」構想を知っていたはずの新藤富五郎は、副理事長兼副学長として城西大学において野口の構想をどのように活かそうとしたのか、そして大学の建学の精神「学問による人間形成」とどのような関係にあるのかなどが明らかにされなくてはならない。あわせて城西大学創立の背景を検討する必要もある。1960年代は教育学の領域において「人間形成」をキーワードとした研究成果が注目された時期でもあるからである⁽⁷⁸⁾。

また、城西大学の建学の精神が「学問による人間形成」であるのに対し、1964年創立の獨協大学は建学の理念として創立者天野貞祐の言葉「大学は学問を通じての人間形成の場である」を掲げている。天野貞祐は日本の戦後の道德教育を語るうえで欠くことのできない人物であり、カントやヘーゲルに関する哲学的な研究成果を基盤としながら「自由」の概念について論じた研究者でもある⁽⁷⁹⁾。短い標語には類似性があるようにみえても、建学の精神の根底にある考え方には違いがあるはずである。これらの検討については今後の課題としたい。

付記

本研究は、城西大学2018年度学長所管研究奨励金交付に伴う研究（研究代表者村越純子）：研究テーマ「城西大学史研究—建学の精神に関する考察—」および、城西大学2022年度学長所管研究奨励金交付に伴う研究（研究代表者村越純子）：研究テーマ「城西大学史研究—建学の精神に関する考察（2）—」による研究成果の一部である。

〔註〕

- (1) 城西大学公式ホームページには「建学の精神」として「学問による人間形成」という標語が掲載されている。
(<https://www.josai.ac.jp/about/overview/spirit/>) (2023年9月23日参照)。今日では大学の理念として「建学の精神「学問による人間形成」に基づき、社会に有為な人材を育成するとともに、人類文化の発展に寄与すること」を掲げている。(城西大学公式ホームページ「教育目標・各種方針・ポリシー」の「2023 (2024. 4 入学者用) 1. 大学全体理念等」による。) (https://www.josai.ac.jp/media/1_2023_zentai_rinen_mokuteki.pdf) (2023年9月23日参照) 「学問による人間形成」という表現は、学校法人城西大学編・発行 (2008) 『学校法人城西大学40周年記念誌—われら新しき文化を創る—』にはみられない。
- (2) 同上, 『学校法人城西大学40周年記念誌—われら新しき文化を創る—』 pp. 4-5。
- (3) 水田三喜男は城西大学創立十周年記念式典における式辞で次のように述べている。「残念なことは、本学創設の最大功労者であられる新藤富五郎先生が病床にあられ、本日の式典に出席してご一同に対して感謝のことばを述べえないことでもあります。先生は私と同郷の教育家で、かねてから新しい大学の創設を意図されており、私はその熱意に動かされ、かつ建学の精神において互いに共鳴するところがあって、相携えて今日にいたったのであります。」(水田三喜男追想集刊行委員会編・発行 (1977) 『おもひ出一水田三喜男追想集』所収, 「城西大学創立十周年記念式典における水田理事長式辞」 pp. 526-527)
- (4) 国立公文書館所蔵文書件名「学校法人城西大学寄附行為の認可申請について」(請求番号: 昭63文部00425100) 所収の「城西大学設立趣意書」から引用。
- (5) 大井令雄 (1985) 「中学校における新教育の遺産—野口援太郎と城西学園」大谷大学哲学学会編『哲学論集』32, pp. 1-16。中野光・高野源治・川口幸宏 (1988) 『児童の村小学校』(教育名著選集③), 黎明書房, pp. 65-72。
- (6) 同上, 『児童の村小学校』, p. 72。
- (7) 清水康幸 (1987) 「『野口援太郎先生小伝』解説」, 野口先生建碑会『野口援太郎先生小伝』(伝記叢書8), 大空社, 巻末所収, p. 5。
- (8) 中野光 (2008) 『学校改革の史的原像—「大正自由教育」の系譜をたどって』黎明書房, p. 243引用。大井令雄 (1984) 『日本の「新教育」思想—野口援太郎を中心に—』勁草書房, pp. 101-123, および三羽光彦 (1999) 『六・三・三制の成立』法律文化社, pp. 32-38を参照。
- (9) 清水康幸 (1984) 「城西学園中学校」, 民間教育史料研究会編『教育の世紀社の総合的研究』一光社, pp. 294-295, に詳しい。
- (10) 同上, p. 296。
- (11) 中島久万吉については, 村山元理 (2015) 『中島久万吉と帝人事件—財界人から精神的指導者へ』(一橋大学大学院商学研究科博士論文), 一橋大学機関リポジトリ

- (<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27291>) を参照した (最終閲覧日2023年9月23日)。同博士論文は「改訂増補」され, 村山元理 (2023) 『中島久万吉—高僧といわれた財界世話役の研究』文真堂, として刊行されている。また, 中島久万吉 (1951) 『政界財界五十年』大日本雄弁会講談社, を参照した。
- (12) 同上, 村山元理 (2015) 『中島久万吉と帝人事件: 財界人から精神的指導者へ』 p. 2。
- (13) 村山元理 (2011) 「財界人の歴史観—男爵中島久万吉の第一次世界大戦後の世界像」『韓国経営史学』26 (3), p. 260。
- (14) 同上, p. 273。
- (15) 橋本美保・田中智志編著 (2015) 『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂。橋本美保編著 (2018) 『大正新教育の受容史』東信堂。
- (16) 橋本美保・田中智志編著 (2015) 『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂, pp. 12-14。
- (17) 同上。
- (18) 城西学園校史編集委員会編 (1978) 『資料城西学園六十年史』, 城西学園創立六十周年記念事業実行委員会, p. 18。
- (19) 東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」(請求番号303.B3.11 (33)) 所収「設立要項」。
- (20) 同上, 「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収「学則」。
- (21) 同上, 「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収「私立城西実務学校設立ニ関スル調査」。
- (22) 前掲, 『資料城西学園六十年史』 p. 25。
- (23) 前掲, 東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収の「日本運送株式会社専務取締役竹内龍雄」による大正7年7月10日付証明書の記載による。
- (24) 東京都公文書館所蔵文書件名「財団法人城西学園中学校設置ノ件」(請求番号309.F2.05 (5)) 所収の「大正十四年度私立城西学園収支決算報告書(写)」の「備考」から引用。明治運送株式会社は国際運送株式会社の姉妹会社である(国際通運株式会社編・発行 (1938) 『国際通運株式会社史』 pp. 258-260)。
- (25) 前掲, 東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収の「設立者履歴」。
- (26) 前掲, 村山元理 (2023) 『中島久万吉』 p. 266。
- (27) 前掲, 『国際通運株式会社史』 pp. 258-260およびp. 268。
- (28) 株式会社丸運編・発行 (1993) 『創業百年史』 pp. 115-117。そこでは, 竹内龍雄は篤志家の金原明善の高弟であるため, 「城西実務学校は金原明善の理想に基づく教育理念に支えられ, 運営された」と記されている。竹内龍雄自身は次のように述べている。「大正七年十月, 僕が多年の理想である真剣味のある青年を教育する目的で, 城西実務学校を創設し, 教育は一切文学士中村春二先生に託し,

僕は常任幹事となった。」(野口亮編(1950)『明善龍雄苗子』一隅社, p. 55。)

- (29) 前掲, 村山元理(2023)『中島久万吉』p. 79。
- (30) 中島久万吉は1921年10月から工学博士團琢磨を団長とする英米訪問実業団一行に加わり, いくつかの「欧米に於る新教育主義の実施施設」を視察した。「スイスに於て有名なモンテスソリ博士の経営に係る学園を視察するの機会を得た」と述べている。(前掲, 中島久万吉(1951)『政界財界五十年』pp. 174-185。)
- (31) 同上, 『核心之問題』「はしかき」p. 19。
- (32) 同上, 『核心之問題』「はしかき」pp. 20-21。
- (33) 同上, 『核心之問題』p. 125。
- (34) 同上, 『核心之問題』p. 125。
- (35) 今日, Adult Educationは「成人教育」と表記されるが, ここでは中島の表記「成年教育」のままとした。中島はイギリスの「成年教育委員会報告書」を閲覧したと述べている。1920年代から1930年代にかけたイギリスおよび日本における成人教育の動向については, 米山光儀(1996)「世界成人教育協会と日本の成人教育レポート」『哲学』(慶應義塾大学三田哲学会) 100, pp. 325-350を参照した。
- (36) 前掲, 『核心之問題』pp. 63-82。
- (37) 同上, 『核心之問題』p. 75。
- (38) 橋本美保(2015)「及川平治の動的教育論」橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂, pp. 203-231。
- (39) 遠座知恵(2018)「プロジェクト・メソッド情報の普及」橋本美保編著『大正新教育の受容史』東信堂, pp. 92-124。
- (40) 遠座知恵・角谷亮太郎「ドルトン・プラン情報の普及」橋本美保編著『大正新教育の受容史』東信堂, pp. 125-163。
- (41) ベルグソン著, 金子馬治, 桂井當之助共訳(初版1913)『創造的進化』早稲田大学出版部, 序, から引用。
- (42) 中島久万吉は, ベルグソン著, 金子馬治, 桂井當之助共訳(初版1913)『創造的進化』早稲田大学出版部を参照したり要約したりしたと思われる。同書は少なくとも1920年に第六版まで再版されており, 訳者は「本譯書が思想界に多大の注意を喚起し, 好評を以て迎へられたのは, 譯者の深く喜ぶ所」と記している。同書を参照して著された, 稲毛詛風, 市川虚山(1914)『ベルグソン哲学の真髓』(大同館, p. 56)では, 「ベルグソンは新しい時代の創造者であると共に新しい魂の創造者である。一層適切にいへば新しい魂を創造する事に依て, 新しい時代をも, 新しい實在をも創造したのである。或意味に於て, 彼は正しくカントと同一の位置を有するものと見る事が出来る」と評されている。
- (43) 前掲, 『核心之問題』pp. 85-104。前掲, ベルグソン著(初版1913)『創造的進化』における「獨創力」は, 合田正人, 松井久訳(2010)『創造的進化』では「自主性」

と訳されている。

- (44) 同上, 『核心之問題』pp. 86-89。
- (45) 同上, 『核心之問題』pp. 106-107。中島久万吉は, デューイ『民主主義と教育』の翻訳書『教育哲学概論』(帆足理一郎訳, 洛陽堂, 1919年初版)を参照したり要約したりしたと思われる。
- (46) 同上, 『核心之問題』pp. 105-117。
- (47) 中島は1925年に城西実務学校を野口援太郎に譲ったが, 第2次世界大戦後には城西学園の理事となってその学校経営に貢献した。1958年に学校法人城西学園理事長となった新藤富五郎は, 「城西の五十年」の歴史は「三つの時代」, すなわち「中島時代(実務学校), 野口時代(旧制中学校), 横島時代(旧制中学校→新制高等学校)」からなると指摘している(城西学園同窓会(1969)『城西』創刊号, 城西学園, p. 4)。城西学園創立六十周年記念事業として出版された, 城西学園創立六十周年記念事業実行委員会編・発行(1978)『道程: 新藤富五郎先生の足跡』には, 巻頭に写真が多く掲載されている。そのなかに, 「昭和三十年代後半から新しい展望のもとにさらに前進」という表題がつけられた3枚のうちの1枚に, 中島久万吉と新藤富五郎が共に写っている。2人の関係について新藤は次のように述懐している。
- 「城西学園の歴史を検討した結果児玉九十先生の示唆に基き, 城西実務学校の創立者中島久万吉先生を訪ね理事就任を懇請し, さらに野口先生の後援者であったという下中弥三郎先生をも訪ね同様のお願いをいたしました。両先生とも非常に喜ばれ即座に快諾いただきました。殊に中島先生は両三回お忙しい中を御来校くださりまして生徒にも親しく有難い御訓話をしていただきました。殊に中島先生が, 「校長さん, わたしは忘れていたが自分の小遣銭でつくった学校がこんなに発展したのは誠にうれしい。お金のかかることだろうが, それはわたしがつくってあげるから云ってきなさい」と言われたお言葉は誠にありがたく, 私の肝に銘じて忘れることができない。」(城西学園同窓会(1969)『城西』創刊号, 城西学園, p. 6。)
- (48) 前掲, 東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収の「学則」。
- (49) 城西実務学校は成蹊実務学校を母体とした新教育の系譜に位置づけられると指摘されている。(石橋哲成(2015)「成蹊実務学校を母体とした新学校の系譜—成蹊実務学校から城西実務学校, 明星実務学校への展開—」世界新教育学会編『教育新世界』40(1)No. 63, pp. 69-73)
- (50) 前掲, 中野光(2008)『学校改革の史的原像』pp. 71-72。
- (51) 成蹊学園六十年史編集委員会編(1973)『成蹊学園六十年史』成蹊学園, p. 11。
- (52) 同上, pp. 74-77。
- (53) 前掲, 中野光(2008)『学校改革の史的原像』p. 75。
- (54) 前掲, 『成蹊学園六十年史』pp. 128-129。

- (55) 成蹊学園の建学の精神は「個性の尊重、品性の陶冶、勤労の実践」とされている。(https://www.seikei.ac.jp/gakuen/philosophy/kengaku.html) (2023年9月23日参照)
- (56) 前掲、『資料城西学園六十年史』p. 20。
- (57) 前掲、東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収「学則」。
- (58) 前掲、『成蹊学園六十年史』pp. 103-107。小室弘毅 (2005)「中村春二の教育思想と凝念法」東京大学大学院教育学研究科教育学研究室『研究室紀要』31, pp. 23-33。上田祥士・田畑文明 (2003)『大正自由教育の旗手—実践の中村春二・思想の三浦修吾』小学館スクウェア, pp. 108-115。
- (59) 前掲、東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立認可ノ件」所収「私立城西実務学校寄宿舎規則」。
- (60) 前掲、清水康幸 (1987)『野口援太郎先生小伝』解説』pp. 4-8。
- (61) 東京都公文書館所蔵文書件名「城西実務学校ノ学則変更ノ件」(請求番号306.F4.14 (16)), および、東京都公文書館所蔵文書件名「財団法人城西学園中学校設置ノ件」(請求番号309.F2.05 (5)) 所収の「大正十四年度私立城西学園収支決算報告書(写)」の「備考」を参照。
- (62) 東京都公文書館所蔵文書件名「私立城西実務学校設立者変更ノ件」(請求番号306.F4.15 (6))
- (63) 前掲、東京都公文書館所蔵文書件名「財団法人城西学園中学校設置ノ件」所収の「大正十四年度私立城西学園収支決算報告書(写)」の「備考」を参照。
- (64) 同上、東京都公文書館所蔵文書件名「財団法人城西学園中学校設置ノ件」および、東京都公文書館所蔵文書件名「学園廃止城西学園」(請求番号309.F2.13 (26))。
- (65) 野口援太郎 (1925)「あこがれの城西学園—中等学校に新教育の試み」『教育の世紀』3 (10), pp. 144-150。(民間教育史料研究会編 (1984)『復刻版 教育の世紀9』一光社, 所収。)
- (66) 同上, p. 146。
- (67) 平岡孝輔 (1941)「先生と学校」(城西学園中学校校友会編・発行『城西思藻』16, pp. 43-46) と、前掲『資料城西学園六十年史』(p. 362) を照合して確認した。
- (68) 前掲、『教育の世紀社の総合的研究』pp. 317-318。
- (69) 前掲、『創業百年史』pp. 116-117。
- (70) 同書は、学術出版会『野口援太郎著作集』(第4巻), 日本図書センター, 2009年, に収められている。
- (71) 野口援太郎 (1935)『私の教育思想と其実際』城西学園中学校内木犀會, pp. 20-21。
- (72) 同上, p. 64。
- (73) 同上, pp. 32-42, およびpp. 64-74。
- (74) 前掲、『教育の世紀社の総合的研究』p. 323。
- (75) 福嶋豊治「新藤先生に想う (1) 先生の英語教育」城西学園創立六十周年記念事業実行委員会編・発行 (1978), 『道程：新藤富五郎先生の足跡』pp. 220-221。
- (76) 穂刈四三二「城西大学創立のことども—新藤富五郎

- 先生と大学—」, 同上『道程：新藤富五郎先生の足跡』pp. 438-444。
- (77) 前掲、『教育の世紀社の総合的研究』p. 295。
- (78) 代表的なものとして、原田實博士古希記念教育学論文集編纂委員会編・発行 (1961)『人間形成の明日』や、上田薫 (1964)『人間形成の論理』黎明書房, がある。1963年に京都大学教育学部に教育人間学講座が開設されたことによる影響も大きい (皇紀夫・矢野智司編『日本の教育人間学』玉川大学出版部, 1999年)。また1966年の中等教育審議会答申「後期中等教育の拡充整備について」の中で「人間形成の目標としての期待される人間像」が提示され、「人間形成」についての議論は一層進んだ。
- (79) 貝塚茂樹 (2013)『戦後道徳教育の再考—天野貞祐とその時代』文化書房博文社。同書は天野貞祐という人物を軸として、戦後道徳教育の歩みについて検証しており、とくに文相在任中の天野の「修身科」復活をめぐる発言と「国民実践要領」制定に関わる発言が、1966年の中央教育審議会答申別記「期待される人間像」やその後の学習指導要領の道徳の内容に少なからず影響を与えたことを明らかにしている。なお、同書 (p. 9) において貝塚は、「『大学は学問を通じての人間形成の場である』ことを宣言した獨協大学設置のねらいには、高校までの学校教育が大学入試のための予備校教育に終始しており、大学もまた卒業が安易であるために十分に本来の機能を果たしていないという天野の批判が込められていた」と指摘している。

**Josai Practical School and Josai Gakuen from the educational perspectives of
Kumakichi Nakajima, Haruji Nakamura, and Entaro Noguchi:
For a later study on the founding spirit of Josai University named
“Character Formation through Learning”**

Junko Murakoshi

Abstract

For a later study on the founding spirit of Josai University named “Character Formation through Learning”, I examined the perspectives of education of Kumakichi Nakajima, Haruji Nakamura, and Entaro Noguchi, and also examined the educational content of Josai Practical School and Josai Gakuen. Josai Practical School was the founding body of Josai Gakuen, which in turn was the founding body of Josai University. Kumakichi Nakajima was the founder of Josai Practical School, while Haruji Nakamura was the founder of Seikei Practical School and the first academic affairs supervisor of Josai Practical School. My research clarified that the educational perspectives of these three persons were linked by the idea of “New Education: the Japanese Progressive Education Movement in the Taisho Era”.

Key words: New education, the Japanese Progressive Education Movement in the Taisho Era, Kumakichi Nakajima, Haruji Nakamura, Entaro Noguchi, Josai Practical School, Seikei Practical School, Josai Gakuen, Josai University, founding spirit